

【報告】

高齢者への聞き書きを通して看護学生が学んだこと

駒谷なつみ*¹ 大津美香*² 木浪麻里*³ 佐藤智子*⁴
山田基矢*² 米内山千賀子*² 北嶋結*² 木立るり子*²

(2016年11月25日受付, 2017年6月9日受理)

要旨:本研究の目的は、高齢者への聞き書きによるインタビューの実施によって看護学生にどのような学びが得られるのかを明らかにすることである。老年看護学実習Ⅰを履修した看護学専攻2年次学生19名を対象とし、4グループに分けグループインタビューを行った。全体を通して、看護学生が高齢者への聞き書きを通して学んだことで最も多かったのは、【コミュニケーション技術】であった。高齢者の生活歴を通して、自分たちの生きている時代背景と比較して、学生自身も生活歴を振り返るきっかけとなっていた。老年期の人生を振り返る意義については発達課題と関連した学びが得られていた。また、生活自立度の高い高齢者に直接インタビューを行うことにより、高齢者の様々な側面をプラスに捉える機会となっていた。さらに、学生には高齢者に対する気遣いや思いやりの気持ちも生まれ、聞き書きを通して高齢者理解のための実習目標以外に副次的な効果も得られた。

キーワード:聞き書き, 高齢者, 看護学生, 実習

I. はじめに

わが国は超高齢化社会を迎え、医療保健福祉従事者が高齢者とかかわる機会が非常に多くなっている。そのため、医療保健福祉職を目指す学生が、高齢者の特性を理解することは必須である。高齢者と同居している看護学生は、高齢者を擬似的に体験する演習において、身近な存在である祖父母を通して、老化による機能低下を予測できたとされている¹⁾。高齢者との同居経験は、高齢者理解へ影響する要因であると思われるが、高齢者との同居経験のない核家族の中で育ち、高齢者と接する機会が少ない学生にとっては、高齢者の特性を理解することが困難な状況にあると推察される。

医療保健福祉職を目指す学生の高齢者理解を目的とした教育については、看護師^{2) -13)}、歯科衛生士¹⁴⁾、介護福祉士¹⁵⁾などの職種を志す学生を対象に、様々な取組が行われている。看護学生の高齢者理解を促すための取り組みについては、高齢者へインタビューを実施することにより、高齢者理解を深めようとする教育方法^{2) 6) 10)}、用具を装着

して高齢者の擬似体験をすることにより、高齢者像をイメージする方法³⁻⁵⁾、排尿機能が低下し、おむつを使用している高齢者の理解のため、紙おむつへの排尿体験学習を導入する方法^{11) 12)}などがある。実際に高齢者と接する体験や、ツールを用いて擬似的に高齢者を体験学習することが、高齢者理解に効果が得られるとされている。また、視聴覚教材として、心理描写のある図書を活用すること⁷⁾、映画教材を使用すること⁹⁾、老化をシミュレーション体験できるゲームを活用した学習プログラムを実施することなどにより、高齢者の内面的理解を深める教材の効果が確認されている^{8) 13)}。

擬似体験^{1) 3) 4) 5)}や視聴覚教材の使用^{7) 8) 9) 13)}による学習は、学生にとっては高齢者のイメージがもたらされるという利点がある。一方、回想法、ライフレビュー、ライフヒストリーインタビューなどのインタビュー^{2) 16) 17)}による学習は、直接、高齢者に接することによって、興味・態度・思いに関する高齢者への情意領域の学習効果が高まるなど、高齢者理解が一層深まると考えられている。さらに、インタビューによる学習は、学生のみならず、高齢者にとっても利点が得られ、相互作用があると考えられる。回想法は過去から現在、未来へとつながっていく自分自身のあり方、アイデンティティを確かめる行為であり¹⁸⁾、また、ライフレビューにより人生において経験してきた事柄を回顧することは、老年期の自我の統合と絶望との間において生じる心理的危機を乗り越え、適応し、老年期における発達課題の達成に有用であるとされている¹⁹⁾。特に、インタビューにより行われる聞き書きは、高齢者が語りを通して人生を回顧することに加えて、実施後においても、高齢者が歩んできた時代の風土や文化も含めた個々の人生の語り語り手である高齢者の言葉で残される貴重な一冊を手にする²⁰⁾ことから、フィードバックの機会も得られる。学

*1 弘前大学医学部附属病院
Hirosaki University School of Medicine & Hospital
〒036-8563 青森県弘前市本町53 TEL:0172-33-5111
53, Honcho, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8563, Japan
Correspondence Author koma.natsu.m24@gmail.com

*2 弘前大学大学院保健学研究科
Hirosaki University Graduate School of Health Sciences
〒036-8564 青森県弘前市本町66-1 TEL:0172-33-5111
66-1, Honcho, Hirosaki-shi, Aomori, 036-8564, Japan

*3 一般財団法人仙台厚生病院 Sendai Kousei Hospital
〒980-0873 宮城県仙台市青葉区広瀬町4-15 TEL: 022-222-6181
4-15, Hirose-cho, Aoba-ku, Sendai-shi, Miyagi, 980-0873, Japan

*4 東京歯科大学 市川総合病院
Tokyo Dental College Ichikawa General Hospital
〒272-8513 千葉県市川市野野 5-11-13 TEL: 047-322-0151
5-11-13, Kanno, Ichikawa-shi, Chiba-ken, 272-8513, Japan

生においても、インタビューの実施時のみならず、冊子の作成プロセスにおいても、学びのフィードバックとなり、聞き書きは学生と高齢者の双方に利点があり、高齢者理解に意義のある学習方法であると考えられる。

しかしながら、聞き書きによるインタビューを通して、高齢者理解を促す学習により、看護学生がどのような学びを得ているのかは明らかにされていない。そこで、本研究では、聞き書きによるインタビューの実施によって看護学生にどのような学びが得られるのかを明らかにすることとした。

II. 対象と方法

1. 対象

A 大学において老年看護学実習 I (1 単位 45 時間) を履修した看護学専攻 2 年次学生を対象とした。平成 26 年度及び平成 27 年度の 2 年次学生 80 名、計 160 名のうち、自由意思により同意が得られた 19 名を対象とした。

2. 実習目標

実習目標は以下の 3 点である。

- ① 高齢者の現在の思いを傾聴できる。
- ② 高齢者がこれまで歩んでこられた生活歴を通して、その人の全体を理解する姿勢を学ぶ。
- ③ 老年期において人生を振り返ることの意義について理解を深める。

3. 実習内容

1) 実習ガイダンス (1 日)

参加者は実習初日にガイダンスに参加し、実習の概要についての説明を受け、効果的なコミュニケーションスキルや、高齢者との対話について、VTR を用いて学習する。また、臨地実習において実施する聞き書きによるインタビューのガイド作成を行う。

聞き書きとは、高齢者の話を聞き、それを記録し、後世に残すことである²⁰⁾。高齢者にとっては、忘れていた記憶が蘇り、まだ必要とされているという実感を得ることができる。

実習目標の内容を習得するための手段として、本学ではインタビューによる聞き書きを用いている。

2) 臨地実習 (2 日間)

臨地実習では、学生 2~3 名が 1 グループになり、1 人の高齢者から生活歴を聴取する。インタビューガイドを参考に、高齢者が話したい内容に焦点を絞る。高齢者の発言内容についてはノートに記録し、同意が得られた場合には、IC レコーダーに録音する。介護老人福祉施設、介護老人保健施設、通所介護、通所リハビリテーション、サービス付高齢者住宅、介護予防一次予防事業のいずれかの実習場所において、2 日間の実習を行う。

3) 中間学内実習 (1 日)

臨地実習 1 回目の終了後、2 回目の臨地実習前に学内実

習を 1 日行う。1 回目の臨地実習において聴取したインタビューの内容をフィールドノートおよび電子ファイルに整理する。録音が可能であった場合はその内容を整理する。また、再確認が必要な内容を整理して、2 回目のインタビューに臨む。

4) 実習のまとめ (半日)

実習の最終日には、聞き書きを用いた高齢者へのインタビューを通して、高齢者理解において学んだことについて、まとめの発表会を行う。各学生が個人の学びについて、口頭にて発表を行い、全体で学びを共有する。

5) 聞き書き冊子の作成 (1 日)

臨地実習 1 回目及び 2 回目の終了後にはグループごとに、インタビューを通して聞き取った高齢者の話をできるだけ「話し言葉」にして、時系列、あるいは、話した内容に沿って、カテゴリーに分類し、生活歴がわかるようまとめ、A4 サイズ 8 頁分 (表紙、目次、背表紙を含む) の聞き書き冊子を作成する。

4. 方法

1) 調査方法及び調査内容

(1) グループインタビュー

インタビューは臨地実習 2 回目の終了時に計画された。同実習場所において実習を行ったグループを基本として、1 グループを 4~6 名とし、各グループに約 1 時間のインタビューを実施することとした。

インタビューガイドに沿って、半構成的面接法を用いて行うこととした。インタビューガイドの内容は、実習目標を基に作成し、①高齢者の思いを傾聴して学んだこと、②高齢者の生活歴を知ることによって学んだこと、③高齢者が人生を振り返ることの意義、④インタビュー前後の高齢者像、⑤その他学んだこととした。

(2) 自記式質問紙調査

インタビューの数日後、聞き書き冊子の作成後に調査を実施することとした。提出期限は聞き書き冊子の作成後 15 日以内とした。

質問項目は、①参加者の基本属性：年齢、性別、高齢者との同居経験の有無、高齢者や高齢者の抱える問題への興味・関心の有無、高齢者疑似体験の有無、自身の祖父母以外の高齢者と関わった経験の有無、②聞き書きの対象となった高齢者の特徴：年齢、性別、認知症の有無、要介護度を設定した。また、③冊子を作成して学んだことについて自由記述を求めた。

2) 調査日程

2015 年 2 月下旬~3 月上旬、2015 年 8 月下旬~9 月上旬とした。

5. 倫理的配慮

参加者には、事前に本研究の目的、方法、個人情報の保護、研究参加の任意性、参加の可否により成績に影響する等の不利益が生じないこと、データの保存・使用期間、研

究終了後のデータの破棄方法等の内容について、文書および口頭にて説明を行い、自由意思の下、同意が得られた場合にのみ、参加を依頼した。インタビューの実施者については、実習評価に関わる教員を除外し、聞き書きを用いてインタビューを実施した経験のある調査者が担当することとした。自記式質問紙調査については、質問紙の回収をもって同意が得られたこととした。分析では個人が特定されないようプライバシーの保護に努めることとした。また、本研究は研究者の所属する組織の倫理審査において承認された上で調査を実施した（承認番号 HS 2014-034）。

6. 分析方法

インタビューから得られたデータについては、内容を逐語録に起こした。逐語録のデータと自由記載内容について、参加者の意図を読み取り短文に分類しコードとした。そして、意味内容の類似性を基に分析・検討を行くサブカテゴリーとし、さらに、類似性を確認して【カテゴリー】に分類した。

研究結果の妥当性を確保するため、複数の研究者がデータ収集および分析を行った。また、分析結果については、研究参加者 19 名に内容確認を依頼し、結果の内容妥当性の確保に努めた。

III. 結果

1. 参加者の概要

参加者と聞き書きを用いたインタビューの対象高齢者の概要を表 1 に示す。参加者は 19 名であった。祖父母と同居経験のあるのは 13 名（68.4%）、高齢者擬似体験の経験者は 7 名（36.8%）であった。19 名全員が自分の祖父母以外の高齢者と接触した経験があり、高齢者や高齢者の抱える問題に興味・関心があると回答した。聞き書きを用いたインタビューの対象高齢者は 10 名であり、平均年齢は 82.7 ± 7.3 歳、性別は女性 8 名、男性 2 名であった。認知症の罹患者はなく、自立している高齢者が 6 名、要介護認定を受けているか不明である高齢者が 4 名であった。

以下の結果については、実習指導の評価に役立てるため、実習目標及び研究目的に沿って述べていく。

2. 高齢者の思いを傾聴して学んだこと

表 2 に高齢者の思いを傾聴して学んだことを示す。22 のコードが得られ、11 のサブカテゴリー、5 のカテゴリーに分類された。カテゴリーはコード数が多い順に【満足感】【人生経験からの人間形成】【今と昔の違い】【加齢変化のマイナス面】【高齢者の伝え方・反応】であった。

3. 高齢者の生活歴を知ることで学んだこと

表 3 に高齢者の生活歴を知ることで学んだことを示す。23 のコードが得られ、8 のサブカテゴリー、3 のカテゴリーに分類された。カテゴリーはコード数が多い順に【今と昔の違い】【人生観】【自分たちとの違い】であった。

表 1 参加者と聞き書きを用いたインタビューの対象高齢者の概要

参加者	高齢者との同居経験	高齢者擬似体験	高齢者の年齢	高齢者の性別	高齢者の認知症の有無・要介護度
A	無	無	65	男性	無・不明
B	有	無			
C	無	無	91	男性	無・不明
D	有	無			
E	有	無	79	女性	無・自立
F	有	有			
G	無	有	89	女性	無・自立
H	有	無			
I	有	有	88	女性	無・自立
J	有	無			
K	無	有	82	女性	無・自立
L	有	無			
M	有	無	81	女性	無・不明
N	無	有			
O	有	有	84	女性	無・不明
P	有	無			
Q	有	無	83	女性	無・自立
R	無	有			
S	有	無	85	女性	無・自立

表 2 高齢者の思いを傾聴して学んだこと

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	コード数合計
満足感	今の幸せ	3	5
	家族への感謝	2	
人生経験からの人間形成	苦労経験からの人生形成	2	5
	豊富で貴重な人生経験	2	
	仕事に対する思い・情熱	1	
今と昔の違い	今と昔の違い	3	4
	昔のこと	1	
加齢変化のマイナス面	ネガティブ発言に対する困惑	3	4
	身体的老化の引け目	1	
高齢者の伝え方・反応	高齢者の伝え方	2	4
	会話の工夫に対する答え方	2	

表 3 高齢者の生活歴を知ることで学んだこと

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	コード数合計
今と昔の違い	生活文化の違い	7	16
	昔の不便さ・苦労・良さ	4	
	時代の相違点・類似点	3	
	戦争体験	2	
人生観	仕事や趣味の影響	2	4
	人生観	2	
自分たちとの違い	自分たちの実行力の無さ	2	3
	ものを大事にする	1	

4. 高齢者が人生を振り返ることの意義について学んだこと

表 4 に高齢者が人生を振り返ることの意義について学んだことを示す。19 のコードが得られ、8 のサブカテゴリー、5 のカテゴリーに分類された。カテゴリーはコード数が多い順に【人生を振り返り折り合いをつける】【時間感覚の变

化】【後世・次世代への伝承】【人に対する感謝】【知的活動】であった。

表4 高齢者が人生を振り返ることの意義

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	コード数合計
人生を振り返り折り合いをつける	プラス面・マイナス面を振り返る	4	8
	昔のことを思い出す	2	
	折り合いをつける	2	
時間感覚の変化	残された時間の過ごし方を考える	2	4
	充実した時間	2	
後世・次世代への伝承	後世・次世代への伝承	3	3
人に対する感謝	人に対する感謝	2	2
知的活動	知的活動	2	2

5. 聞き書き冊子を作成して学んだこと

表5に聞き書き冊子を作成して学んだことを示す。29のコードが得られ、8のサブカテゴリー、3のカテゴリーに分類された。カテゴリーはコード数が多い順に【冊子の読みやすさ】【気遣い・配慮】【忠実に作成】であった。

表5 聞き書き冊子を作成して学んだこと

カテゴリー	サブカテゴリー	コード	コード数合計
冊子の読みやすさ	文字の見やすさ	8	15
	読みやすさ	5	
	違和感のないようにする	2	
気遣い・配慮	気持ちへの配慮	5	10
	心理・精神機能に対する配慮	3	
	高齢者に対する思い	2	
忠実に作成	捉え方・汲み取り方の工夫	2	4
	正確に作成	2	

6. インタビュー前後の高齢者像

表6にインタビュー前の高齢者像を示す。17のコードが得られ、7のサブカテゴリー、3のカテゴリーに分類された。カテゴリーはコード数が多い順に【加齢変化のマイナス面】【祖父母のイメージ】【不安】であり、ネガティブな印象が多かった。

表7にインタビュー後の高齢者像を示す。24のコードが得られ、9のサブカテゴリー、3のカテゴリーに分類された。カテゴリーはコード数が多い順に【話しやすい】【元気で内面が強い】【プラスのイメージ】であり、インタビュー後にはポジティブな印象が多かった。

7. その他学んだこと

表8にその他学んだことを示す。33のコードが得られ、10のサブカテゴリー、2のカテゴリーに分類された。カテゴリーは【コミュニケーション技術】のコード数が32と最多であった。また、【体調への気遣い】が1であった。

表6 インタビュー前の高齢者像

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	コード数合計
加齢変化のマイナス面	要介護	4	7
	認知症	2	
	難聴	1	
祖父母のイメージ	祖父母のイメージ	3	6
	祖母のイメージ	3	
不安	用心する	3	4
	津軽弁に対する不安	1	

表7 インタビュー後の高齢者像

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	コード数合計
話しやすい	話しやすい	6	13
	気遣いができる	2	
	コミュニケーションが取れる	2	
	先輩のよう	2	
	親しみやすい	1	
元気で内面が強い	元気	5	9
	祖父母と違いはない	2	
	内面の強さ	2	
プラスのイメージ	プラスのイメージ	2	2

表8 その他学んだこと

カテゴリー	サブカテゴリー	コード数	コード数合計
コミュニケーション技術	方言に関する学び	5	32
	コミュニケーション技術の振り返り	5	
	聞き取りやすい話し方	4	
	座る位置や目線を合わせること	4	
	間・沈黙への対応	4	
	話を広げる際の知識の必要性	3	
	会話のつなげ方	3	
	理解できない時の対処	2	
	敬意をもって話す態度	2	
	体調への気遣い	体調への気遣い	

IV. 考察

本研究結果から得られた老年看護学の特徴的な学びを以下の4点から考察する。

1. 高齢者の生活歴を通しての学びと高齢者像

生活歴から戦時中のことや戦後の暮らしにおいて物資がなく配給等を受け苦労したこと等、高齢者の時代背景として、戦争に関わる体験が挙げられていた。戦後の荒廃の中で物を大切にするための知恵が培われ、また、戦争の影響により、やりたいことに制約を受けた環境に置かれていた高齢者の生活歴を通して、今が恵まれていると感じたり、恵まれている環境にありながら自分たちの実行力のなさを感じていた。戦争に関わる語りは現代の学生が経験することのできない貴重な体験談であり、学生は高齢者の発言内容をありのままに肯定的に受け止め、自分たちの生きている時代背景と比較して、【今と昔の違い】【自分たちとの違

い】を認識し、学生自身も生活歴を振り返るきっかけとなっていた。

高齢者像は実習前には、身近な高齢者である【祖父母のイメージ】、授業で学習した＜要介護＞＜難聴＞等の【加齢変化のマイナス面】のイメージが強く、高齢者をネガティブに捉えている傾向があった。しかし、実習後には学生の全ての発言が【話しやすい】【元気で内面が強い】等、プラスでポジティブな傾向のイメージに変化した。インタビューの対象となった高齢者が身体的に自立していたのは6名であり、4名については不明であったが、学生はインタビューを通して直接高齢者と関わることによって、＜元気＞＜コミュニケーションが取れる＞のような身体面のみならず、＜話しやすい＞＜親しみやすい＞＜気遣いができる＞等、精神・社会面にも目が向けられるようになったことが窺えた。

先行研究では、老年看護学を学ぶ直前の看護学生の高齢者イメージは、全体的にマイナス面のイメージを抱いている²¹⁾。しかし、老年看護学に関する講義を受けることによりマイナスイメージが減少し²²⁾、さらに、健康な高齢者と接した後の看護学生は、高齢者の持てる力を認識し、肯定的なイメージを多く持っていた²³⁾。本研究においても同様に、生活自立度の高い高齢者に直接インタビューを行うことにより、高齢者の様々な側面をプラスに捉える機会となっていた。本研究の学生が体験する老年看護学実習Ⅰは2年生を対象としており、老年看護学概論において高齢者の発達課題や身体・精神・社会的加齢変化等を学習した約1ヵ月後に実施されることから、学生が早い段階で高齢者に対するプラスのイメージを持ちやすく、高齢者理解を深めるための学習形態として有用であると考えられた。その一方、4年次に履修予定である老年看護学実習Ⅱでは様々な疾患や健康障害のある要介護高齢者と関わるため、日常生活自立度の高い高齢者とのギャップに戸惑いを抱く可能性もあると考えられた。そのため、授業や演習を通して加齢に伴う個体差を認識できるよう教授していく必要がある。また、高齢者像についてはインタビュー後に前後のイメージの変化を同時に聴取していたことから、インタビュー後のイメージがプラスに偏った可能性も否めない。今後は前後においてデータ収集を行い、比較検討する必要がある。

2. 老年期の発達課題の理解

老年期に人生を振り返る意義は老年期の発達課題に関する実習目標であった。【人生を振り返り折り合いをつける】等が抽出され、人生にはプラスとマイナスの両面があり、戦争体験や子育てなど大変なこともあるが、それらに向き合い折り合いをつけることが人生を振り返る意義であると学んでいた。これらはエリクソン²⁴⁾の「統合 対 絶望」に類似しており、また、【後世・次世代への伝承】はペック²⁵⁾の発達課題である「自我の超越 対 自我への没入」に類似する内容であった。ペック²⁵⁾の発達課題における危

機回避への対策では、過去・現在・未来へ向けて永続的に希望を見出す（子供や文化、社会に貢献しようとする活動など）が挙げられている。【時間感覚の変化】についても、バトラー²⁶⁾の老年期の世界観（人生で将来のない唯一の時期に物事を将来という観点から考えない）と内容が類似していたことから、老年期の人生を振り返る意義については発達課題や老年期の世界観と関連した学習効果が得られていたと考えられた。

一方、【加齢変化のマイナス面】として＜ネガティブ発言に対する困惑＞があり、死に関する発言の反応に困ったという学生もいた。ペック²⁵⁾の発達課題には「自我の超越 対 自我への没入」の危機があるが、これは死の危機であり、インタビューの対象となった高齢者の死に対する発言は、老年期の発達課題に関連した発言であると思われる。学生には老年期にある高齢者の死に関する発言をタブー視せずに、人生の延長線上には自然な死があることを理解でき、発達課題に対する学びが深まるよう事前指導を強化する必要があると考える。

3. 聞き書きを通しての学び

聞き書き冊子の作成を通して、＜文字の見やすさ＞＜読みやすさ＞等、高齢者の視力の衰えを考慮した高齢者にとっての【冊子の読みやすさ】の工夫をしたり、その反面、字を大きくし過ぎると逆に自尊心を傷つけてしまう恐れがあると【気遣い・配慮】をしたり、高齢者の加齢変化やそれに伴う心理面に配慮することを学んでいた。聞き書きに際して最も大切なことは、語り手が話したことをいかにして引き出すか²⁰⁾であるが、＜捉え方・汲み取り方の工夫＞＜正確に作成＞等、高齢者が自ら話す内容を基に【忠実に作成】できるよう気をつけながら聞き書きを作成していたと考えられた。また、実習時間はわずか2～4時間の高齢者との接触の機会ではあったが、＜気持ちへの配慮＞＜心理・精神機能に対する配慮＞＜高齢者に対する思い＞等、学生には高齢者に対する気遣いや思いやりの気持ちも生まれ、聞き書きを通して高齢者理解のための実習目標以外に副次的な効果も得られたと考えられた。高齢者への聞き書きを通しての看護学生の学びに関する先行研究はほとんど見当たらないため、本結果は貴重であった。

4. コミュニケーションに関する学び

全体を通してコード数が32と、看護学生が高齢者への聞き書きを通して学んだことで最も多かったのは、【コミュニケーション技術】であった。本実習は臨地実習の中で最も早い時期に行われていることが関連し、受持ち対象者とコミュニケーションをとることにまだ慣れていないことが考えられた。しかし、不慣れではあったが、＜聞き取りやすい話し方＞＜座る位置や視線を合わせること＞等、高齢者に配慮したコミュニケーションの工夫もみられていた。

サブカテゴリーの中では、＜方言に関する学び＞のコード数が5と最も多く、津軽地域以外の出身学生が方言の理

解に苦慮していたことから、津軽弁を話す高齢者とコミュニケーションをとる機会がまだ少ないことが考えられた。学生配置については、津軽地域の出身学生1名が配置されるよう教育的配慮をしたうえで、実習前には希望者に津軽弁を理解するための書籍の貸し出しを行っていたが、実際では津軽弁の単語がどこで区切られるのか聞き取りが困難であったとの意見もあり、初回の臨地実習において方言を理解することには限界があった。しかしながら、津軽弁を理解できなくても「理解できない時の対処」「会話のつなげ方」等、聞き返したり、会話をつなげようと努力したりと対処行動がとれている学生もいた。津軽弁を理解する努力とともに、実践の場において個人の学習方略を遂行できるような指導もまた必要であると考えた。

V. 結論

本研究から得られた結論は以下のようになる。

- 1) 高齢者の生活歴を通して、自分たちの生きている時代背景と比較して、学生自身も生活歴を振り返るきっかけとなっていた。
- 2) 生活自立度の高い高齢者に直接インタビューを行うことにより、高齢者の様々な側面をプラスに捉える機会となっていた。
- 3) 老年期の人生を振り返る意義については発達課題や老年期の世界観と関連した学習効果が得られていた。
- 4) 学生には高齢者に対する気遣いや思いやりの気持ちも生まれ、聞き書きを通して高齢者理解のための実習目標以外に副次的な効果も得られた。
- 5) 全体を通して、看護学生が高齢者への聞き書きを通して学んだことで最も多かったのは、【コミュニケーション技術】であった。また、津軽地域以外の出身学生が方言の理解に苦慮していた。

謝辞

本研究のために貴重なデータを提供いただいた対象者の皆様に深謝いたします。

引用文献

- 1) 高柳智子,丸橋佐和子,その他: 看護学生の高齢者疑似体験による学習効果—高齢者との同居の有無による比較—. 福井医科大学研究雑誌, 1 (3) : 469-480, 2000.
- 2) 小泉美佐子,伊藤まゆみ,宮本美佐: 老年看護学の対象理解にライフヒストリー・インタビューをとり入れた学習効果. 老年看護学, 5 (1) : 140-146, 2000.
- 3) 服部紀子,中村真理子: 老年イメージの変化—高齢者疑似体験前後の比較から—. 東海大学医療技術短期大学総合看護研究施設年報, 11: 12-25, 2001.
- 4) 清水洋子,小野奈津子,その他: 看護学生における高齢者疑似

- 体験の取り組みと学習効果—インスタント・シニア・プログラムを導入して—. 日本在宅ケア学会誌, 4 (3) : 55-61, 2001.
- 5) 竹田恵子,兼光洋子,太湯好子: 高齢者疑似体験による高齢者理解の可能性と限界—実施時期による学習効果の違い—. 川崎医療福祉学会誌, 11 (1) : 65-73, 2001.
 - 6) 吉本知恵,横川絹恵,一原由美子: 看護学生の高齢者理解を深めるための教育方法—在宅高齢者へのインタビューからの学び. 香川県立医療短期大学紀要, 4: 105-111, 2002.
 - 7) 鳴海喜代子,田中敦子,伊藤道子: 老年看護学における高齢者理解のための教育方法の検討—看護学生の情緒的理解を促す教材の活用—. 老年看護学, 8 (1) : 70-77, 2003.
 - 8) 長畑多代: シミュレーションゲーム形式による高齢者疑似体験学習の効果と課題. 大阪府立看護大学紀要, 10 (1) : 59-64, 2004.
 - 9) 古城幸子, 木下香織: 高齢者理解を広げる映画教材の教育効果. 新見公立短期大学紀要, 28: 1-6, 2007.
 - 10) 森田恵子,石川幸代,永田美和子: ライフヒストリー・インタビューを用いた学生の学びの分析—個人の学びとグループワークの学びとの比較—. 名桜大学紀要, 14: 333-341, 2009.
 - 11) 平尾由美子,河原畑尚美,その他: 「排尿機能低下のある高齢者の援助」の理解のための教育方法の効果—その1 学生の「おむつ排尿体験の際に工夫したこと」のレポート分析から—. 北日本看護学会誌, 14 (2) : 1-9, 2012.
 - 12) 田中美江,河原畑尚美,その他: 「排尿機能低下のある高齢者の援助」の理解のための教育方法の効果—その2 学生の「おむつ排尿体験時の困ったこと,心配・不安だったこと」のレポート分析から—. 北日本看護学会誌, 14 (2) : 11-19, 2012.
 - 13) 廣川聖子,横山ハツミ: CAI教材『エイジングゲーム2007』を用いた老化の体験学習における学び. 岐阜医療科学大学紀要, 7: 111-118, 2013.
 - 14) 廣岡千鶴,山崎忍,その他: 高齢者理解のための義歯の疑似体験学習の試み. 保健つるみ, 34: 7-13, 2011.
 - 15) 田岡洋子,村岡洋子: アンケート「高齢者にお話を聴く」から得た現代の高齢者像. 京都短期大学論集, 29 (1) : 27-60, 2001.
 - 16) 櫻井清美,尾島喜代美: ライフヒストリーインタビューを在宅高齢者に行った看護学生の思い; 情意領域の学習効果. 日本看護学会論文集地域看護, 44: 192-195, 2014.
 - 17) 蓑原文子,畑野相子,岡美登里: ライフインタビュー体験の共有がもたらす効果: 高齢者イメージとエイジズムの観点からの考察. 滋賀医科大学看護学ジャーナル, 13 (1) : 43 -46, 2015.
 - 18) 菅寛子 (野村豊子監修): 個人回想法をとおして認知症の人のココロに出会う. おはよう21, 1月号: 50-53, 2010.
 - 19) 正木治恵,真田弘美: 老年看護学概論「老いを生きる」を支えることとは. 南江堂, 122-125, 2011.
 - 20) 小田豊二: 「聞き書き」をはじめよう. 図書出版木屋舎, 1-110, 2012.
 - 21) 梶谷みゆき,倉鋪桂子: 看護学生の老人イメージに関する研

究. 島根県立看護短期大学紀要, 5: 101-107, 2000.

- 22) 岩井恵子, 森永聡美: 臨地実習が高齢者イメージに及ぼす影響の分析. 関西医療大学紀要, 5: 54-62, 2011.
- 23) 樋田小百合, 熊田ますみ, その他: 健康高齢者との関わりによる看護学生の高齢者イメージ. 岐阜医療科学大学紀要, 8: 7-15, 2014.
- 24) エリクソン EH・エリクソン JM・キヴニク HQ 著, 村瀬孝雄・近藤邦夫訳: ライフサイクル, その完結, 増補版, みすず書房, 71-86, 2001.
- 25) Peck, R.: Psychological developments in the second half of life. In J. E. Anderson, (Ed.), Psychological Aspects of Aging. Washington, DC: American Psychological Association, 42 -53, 1956.
- 26) ロバート・N・バトラー著, 内菌耕二監訳: 老後はなぜ悲劇なのか?: アメリカの老人たちの生活. メヂカルフレンド社, 473-474, 1991.

【Report】

What nursing students have learned by writing down what they heard from elderly people

NATSUMI KOMAYA^{*1} HARUKA OTSU^{*2} MARI KINAMI^{*3}
TOMOKO SATO^{*4} MOTOYA YAMADA^{*2} CHIKAKO YONAIYAMA^{*2}
YU KITAJIMA^{*2} RURIKO KIDACHI^{*2}

(Received November 25, 2016 ; Accepted June 9, 2017)

Abstract : The purpose of the study is to clarify what nursing students have learned by writing down what they heard from elderly people. Nineteen second-year nursing students who took Gerontological Nursing, Practice I participated. They were divided into 4 groups, and group interviews were carried out. The most common thing they learned was communication skills as a whole. It was an opportunity for the nursing students to take a look back on their own life history through hearing the history of the elderly peoples' lives. The significance of taking a look back on human life at an old age provided learning effects in connection with a developmental theme. It was also an opportunity for the nursing students to actively take over various aspects by interviewing mostly independent elderly people face-to-face. Additionally, feelings of concern and caring towards the elderly people were cultivated. Hence, through writing down what they heard from elderly people, there were not only sidebar effects but they also achieved the aims of the practice regarding understanding elderly people.

Keywords: hearing and writing down, elderly people, nursing students, practicum